

2022年3月13日

## 主の御許へ受け入れられる

ヨハネによる福音書 14：1～7

### ・逝去者記念礼拝を

新型コロナウイルスへの対応で2部制となっていますが、今日、今年の逝去者記念礼拝を神様に献げたいと思います。週報に記載していますように、この1年で9名の方を神様の御許にお送りすることになりました。そして、私が高知教会に赴任して以降、約80名の方の名前が逝去者名簿に加えられることになりました。

共に信仰の道筋を歩んだ方々を、神様の御許へお送りするという事は、本当に悲しいことです。神様は、そのお一人お一人と共に歩んでくださいました。イザヤ書の言葉で言えば、神様はそのお一人お一人を生涯変わらず背負い続けてくださったのです。神様に支えられて生涯を歩まれた、しかし、それだけではありません。神様との関わりは、生きている間の限定ではありません。人生の死の先にも続く、驚くべき神様との関りに望みを置かれて歩んだのです。そして、聖書の言葉を通して、その恵みの中を、今実際に歩まれていることを思うのです。

今日は、この逝去者名簿に名が記されているお一人お一人が進み出た歩み、人間の死を超える神様との深い交わりを受け止めることを通して、今年の逝去者記念礼拝を神様に献げしていきたいと思います。

### ・心を騒がせる姿

今日の聖書の箇所を少し広く見てみますと、13章から続く最後の晩餐の場面で、イエス様が弟子たちにお語りになっている言葉です。いよいよ十字架にかかれる時が来た、そのことがイエス様には分かっていました。それで、イエス様が十字架にかけられるという非常に厳しい状況に直面することになる弟子たちに、イエス様がどうしても語っておかなければならない、そう思われた言葉の一つなのです。つまり、危機の中を歩むことになる弟子たちへの、イエス様のメッセージなのです。

まず、イエス様はこう言われます。「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしを信じなさい。(1節)」と。この時、弟子たちは、心を騒がせているのです。それは、イエス様が33節で言われているように、「わたしが行く所にあなたたちは来ることが出来ない」と言われたからです。この言葉には、大切なことが示されていると思います。それは、イエス様はここから立ち去られるということです。勿論、神様の御許へ帰るという意味でイエス様はおっしゃっておられますが、弟子たちにとっては直接のイエス様との関りが終わりを迎えるということなのです。それは、弟子たちにとって、本当に驚きの言葉だったのではないかと思います。

弟子たちは、ここまでイエス様と共に歩んできたのです。イエス様のお言葉を直接聞き、イエス様のお姿を直接見て歩んできたのです。ここまで、いろいろの恵みを与えられてきました。そして、様々の困難もまた、イエス様によって支えられて歩んできたのです。けれども、イエス様がここを立ち去られて、更に、あなたがたはついてくることが出来ないと言われたのです。イエス様との深い交わりの中を歩む、その歩みが突然、途絶えてしまうのです。状況が一変するのです。そのことを告げているイエス様の言葉は、弟子たちを動揺させることになりました。彼らは、深い絶望の中に立たされようとしているのです。本当にそういう中を歩いていくことが出来るだろうか、そういう恐れが、弟子たちを覆っているのです。

私たちは、当たり前前とっていた日常が奪われ、本当にこの先どうなるのだろうかと思わされる時があると思います。今、コロナ前には当たり前前と思われていたことが奪われた中を生きています。また、先日は、突然ある日から戦禍が起り、多くの人々が平穏な日常を奪われてしまうということも起こっています。これまで歩んできた日常が、ある日を境にして一変する。そして、その状況の中で、本当に乗り越えることが出来るのだろうかと心を騒がせている。その弟子たちの思いは、決して他人事ではないことを思います。私たちも、しばしば、そういう思いに心を捉われるのではないかと思います。

そして、私たちもいろいろな困難に直面すると思いますが、しかし、その中で最も深刻問題は、死の問題ではないかと思います。ある人が「私たち日本の社会ではほとんど死について語られることはない。あたかも死が現実には存在していないかのようにして歩いていけるのではないか」と言っています。その通りだと思います。昨今、「終活」が盛んになり、葬儀の形や葬られ方についてはいろいろと話されますが、そもそも「人間の死」とは何かということについては、ほとんど語られていないように思います。死は誰にも例外なく訪れるのです。死を迎えなくよい人間は、一人としていないのです。誰もが死を迎えることになる。そうして、その死をどう迎えるかは大変大きな問題でありながら、しかし、その死そのものについて、ほとんど語られることはないのです。

どうしてそうになってしまうのか。その人はこう言っているのです。「解決がないからだ」と。死に直面する、しかし、どう受け止めたらよいか分からない。結果、飲み込まれるようにして歩むしかない。そういう思いではないかということなのです。一般の葬儀なので、繰り返される「天国に行って、見守っていてくれる」という言葉、それがそう思いたいという遺族の願いだけであるならば、それは結局虚しい言葉になってしまうかもしれません。自分たちの願望だけだとすれば、それは真の意味での解決となることはないのです。例えば、突然病気なので死が迫って来ている、死を実感

を持って受け止める時、そのような淡い願望というものは、支えとなり得ないのです。そうして、本当に心を騒がせてしまう、それが私たちの人間の姿なのかもしれません。

・「わたしを頼れ」

そういう私たちに向かって、イエス様ははっきりと語られるのです。「神を信じなさい。そして、わたしを信じなさい。」と。神を信じ、私を信じなさいと、イエス様は、私たちに向かって明確に語られるのです。死の現実の前でたじろいでしまう、そういう私たちに向かってなのです。死の現実の前でたじろいでしまう私たちが、その心を騒がせている所から逃れていくことが出来る道は、唯一つなのです。それは、神様を信じ、イエス様を信じることなのです。そこにのみ、死の現実の中を歩むことが出来る道があるのです。

しかし、この言葉は、誤解されているのではないかと私は思います。死という大変な現実の前でも、ちゃんと神様、イエス様を固く信じていなければならないと言われているのではないか。死に向き合う状況でも、自分は強い確信を持ち続けることが出来るだろうか、逆に不安に感じられるかもしれません。しかし、イエス様が私たちにお伝えくださるのは、強い信念を持ち続けなさい、そうでないとだめだというようなことではありません。「信じる」と言う言葉について、何度もお話ししていることを繰り返すことをお許しください。この「信じる」という言葉は、聖書が記されている元の言葉の本来の意味合いで言えば、「信頼をする」、更に言えば「頼る」という意味です。つまり、イエス様はちゃんとした確信を持ってと言われたのではなく、「神を頼れ、そして、私を頼れ」、そう言われたのです。そして、神様に頼る、イエス様に頼る時に、全く暗闇に見えていた死の現実のただ中、歩いていく道筋が見えるということなのです。そして、イエス様は、その道へと私たちを招かれるのです。

神様に頼る時に、はっきりと示されるのはこういうことなのです。「わたしの父の家には住む所がたくさんある。」、父の家、つまり神様の御許に、私たちを迎える場所は多くあるということなのです。ですから、私たちは、場所がありませんと神様に言われて、追い出されてしまうことはないのです。神様の家に入る、神様の御許にある数少ない席を争うようにして生きるわけではないのです。神の家に私たちが迎え入れられる場所は、多くあるのです。

そして、この言葉を通して、これから起こることが何かが分かるということです。イエス様自身が実際に神様の御許へ行かれるということなのです。「もしなければ、場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。(2~3 節)」と。イエス様が、神様の許へ帰らえる。そして、直接お会いすることが出来なくなる。そのことで、弟子たち不安の中に立たされているのです。しかし、このことには、本当に大きな意味が

あるということなのです。イエス様ご自身が神様の御許へ帰られるということなのです。そして、そうされるのには、大きな目的があるということなのです。それは「あなたがたのために場所を用意」と言われていることです。弟子たち、そして、私たちのために、神様の許の場所を用意される。私たちを迎えるための場所は、イエス様が整えてくださるのです。そして、ちゃんと準備が出来たら、あなたを迎えるとまで言われるのです。ですから、あなたは神様に迎え入れられる。そして、あなたを迎え入れるための準備は私がする。イエス様がはっきりと語ってくださるのです。そのことがここに示されているのです。ですから、私たちが神様の家に迎え入れられる、神様の御許へ招かれることは、単なる私たちの期待や願望ではなく、イエス様の約束なのです。

#### ・イエス様が行かれる歩み

私たち、神様迎え入れられることを受け止めさせていただく時に、それでも、こういう思いがあるのではないかと思います。その思いをトマスが代弁してくれています。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるのでしょうか。(5節)」、神様の家に迎え入れていただける、その用意が整っている、そのこと分かった。ではどのようにして、神様の家、神様の御許に至ることが出来ることだろうかということなのです。本当に用意されている場所、神の家、つまり、神様の御許へといくことが本当に出来るのだろうか。そのことが分からない。私たちも、トマスと同じような思いを抱えるのではないかと思います。どうしてもそのことで、不安が心を占めていくような思いがするのです。

そういう私たちのために、イエス様は驚くようなことをなされたのです。それは、イエス様が神様の御許へ実際に行かれるということなのです。イエス様がその道を辿っていかれる。そして、イエス様が進んでいかれた道筋、それこそが神様の家に至る道だということなのです。

前任の教会で、以前幼稚園の働きをしていた時に、園外保育があり、近くの山に登る機会がありました。用事があって、私は先に降りることになったのですが、その途中で、道に迷ってしまったのです。森のようなところに迷い込んでしまったのです。しかし、その時、よく見ると、人が歩いたような跡がありました。踏み分け道があったのです。そして、所々に木に布切れが結んであり、道が分かるようになっていました。その道を通って、大きな道に出ることが出来、幼稚園に帰ることが出来ました。先に行った人の踏み分けた道を辿っていく、そういう経験だったのです。

イエス様は、神様の家に実際に行かれるのです。イエス様は神様の家に至られた。だからこそ、イエス様の歩んでくださった道筋は、私たちが神の家に至る道なのです。更に「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとへ行くことができない。(6節)」、イエス様が先を歩んでくださったと言うだけ

ではなく、そこに至る道筋の全てを導いてくださる、ご自身がむしろ「道」として導いてくださっているということです。そして、イエス様は「わたしを通らなければ、だれも父のもとへ行くことができない。」と言われます。このイエス様の言葉は、裏を返して言えば、イエス様という道を辿っていけば、必ず神様の御許へ至ることが出来るということです。私たち、神様の御許に至る道をこれから懸命に探さなければならぬということではないのです。イエス様という道を今歩んでいる、実際に歩んでいるのです。そして、このイエス様という道が、私たちが神様に至る道なのです。イエス様「わたしという道を歩んで神の家に至れ」、「あなたを神の家にまで至らせる、私の導きの内を歩め」と招かれるのです。そして、イエス様は、私たちを導き続けて、言葉を持って語りかけて、進むべき道を示し続けてくださっているのです。そして、イエス様の御声に聞いて歩む、その時、必ず神の御許まで至らせていただけることが出来るのです。

#### ・信仰の先達の歩みを通して

今日この逝去会員記念礼拝において、私たちはこの名簿に名が記されている信仰の先達方その一人一人の歩みを覚えるのです。お一人歩一人の歩まれた姿は、私たちの心に残っているのです。この1年の間に、神様の御許に召された方々の歩みを考えてみても、それぞれの歩まれた姿は全く違っていています。若い日に神様に出会い信仰の道を歩まれた方もいれば、人生の半ばを過ぎで洗礼を受けられた方もおられます。長い闘病生活を送られた方もいれば、本当の突然という形で人生の歩みを閉じられた方もおられます。社会的に大切な働きを担った方もいれば、静かに家庭人として生きられた方もおられます。それぞれに歩みは違うのです。しかし、一つ共通のことがあります。それは、神様に背負われて人生を生き、「父の家に場所がある」というイエス様の約束の中を歩まれたということです。そして、その約束の通りに、神様の御許へと招かれているのです。イエス様の約束の言葉、それがそれぞれの方にとって、どんなに大きな意味を持ったのか、受け止めさせられるのです。

今年1月、3名の方々を神様の御許にお送りをする事になりました。そこに大きな導きがあったことを思います。Aさんは、少し長い闘病の生活を歩まれることになりました。私が高知教会に赴任した当初、よくお電話を頂きました。話の内容は、信仰を巡ってのことです。信仰における疑問が悩みを、率直にお話しくださいました。ご自身では、ちっとも良い信仰者ではありませんとおっしゃっておられましたが、そうして、本当に信仰とは何か、神様を信じるとは何か、受け止めようとされていたことを思うのです。そして、その方の歩みもまた、イエス様の約束の中に置かれていたことを思います。

Bさん。体調を崩されて、ここしばらくは礼拝に出席できませんでした。しかし、

その中でも、スマホで礼拝の音声を聞かれていたと、葬儀の時にご家族からお聞きました。11月が、礼拝出席の最後となりましたが、生涯礼拝を通して神様に会い、歩まれたことを思います。私は、Bさんから繰り返し、「自分は神様に支えられました。本当に人生です。」という言葉をお聞きしました。このことが大変心に残っています。

そして、Cさん。逝去される10日前の礼拝に出席されておられましたが、翌週の礼拝を体調が悪いということで休まれ、月曜日入院、木曜日に召されるということになりました。大変心に残ったのは、今年度の教会員調査票に今年度の年間聖句が書かれたことです。まさに、今この言葉に支えられているという思いだったと思います。そして、12月発行の教会報に今の信仰生活について文章を寄せていただきましたが、その中には「コロナの状況にあっても神様に支えられて感謝」と記されていました。

私は、その様なお姿を受け止めさせていただく時に、神様に支えられて歩む道は、決して生きている間だけでないということを感じるのです。歩みの中で与えられていた恵みは、更に死の先へと繋がっていく。実際にイエス様という道を歩み、そして、更に歩み続けていった証言でもあることを思うのです。

もし、自分が死に直面した時に、不安の中に立たされるのではないかと私自身も思います。しかし、今日この言葉を通して受け止めさせられたのです。自分がどれ程確信を持って神様の許へ帰ると分かっているか、それが中心ではないということです。そうではなくて、イエス様が道に迷う一人一人、励まし、支え、イエス様という道に生涯歩ませ続けてくださる。そうして、人生を歩む。その恵みが、信仰の先達、そのお一人お一人の姿に示されているのです。そして、この道は、途中で途切れることはないのです。必ず神様の御許まで繋がっているのです。これは、私たちがそう思いたいと思って受け止めている願望ではないのです。イエス様が「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとへ行くことができない。」と言われているからです。イエス様という道を辿って、私たちは必ず神様の御許へ至らせていただけるのです。信仰の先達が歩まれた歩みと同じように、私たちも歩まされていくのです。そうして、神様のみ友へ至らせていただけるのです。

私たちも、いつか死に直面する、思い悩む時が来るかもしれません。その私たちを、イエス様は言葉を持って励まし、支え、導いてくださるのです。そうして、歩み続けていく。神様の家、神様の御許へ導いていただけるのです。そのためにも、死の現実の前に立たされ思い悩む時にこそ、イエス様の声に耳を傾けるのです。「あなたは神の家に向かいられる、あなたを神の家に必ず至られる」、このイエス様の約束の言葉に、です。そうして、イエス様と共に歩む、その道をずっと歩み続けさせていただきたいと心から願うのです。